

本日の学び テーマ：「安息日について」テキスト：マルコ2章23節-3章6節

【理解の手がかりとして】

ある「安息日」に、イエス様が麦畑を歩いて行ったとき、同行していた弟子たちが麦の穂を摘んだというエピソードから始まる。これは決して「麦泥棒」のようなことではない。他人の麦畑から麦穂を摘み取ることは律法で認められていた（申命記23:25-26）。しかし安息日にそれを実行することは収穫行為として禁じられていたのであった（出34:21）。

すると、その弟子たちの様子を見ていたファリサイ派（厳格な律法主義）の人々が、安息日の労働を禁じる律法規定を破ったという理由で弟子たちを非難した。この非難に対して、イエス様はファリサイ派の人々に返答するが、イエス様はここで旧約におけるダビデの故事（サムエル上21:1-7）を引き合いに出して、ダビデとその従者たちが空腹に陥ったとき、ダビデは神の家に入り、律法の規定（レビ24:5-9）を破って供えられていたパン（出25:30）を取って食べ、それを従者たちにも与えたと述べられた。このダビデのエピソードそのものは安息日規定とは直接関係はないが、律法で許されていない行為を敢行したという点で共通しており、それを根拠して反論なされたのである。

そして更にこう言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」（2:27）と。——「安息日を心に留め、これを聖別せよ」（出20:8）——これはモーセの「十戒」の4番目の戒めである。この安息日の戒めは、「創造」と「救い」の祝福と感謝を具体的に覚える日として、一週間の一日を「区別する」ことを命じている。ところがその安息日が、イエス様の時代にはきわめて煩瑣な戒律の日に化してしまっていた。イエス様はこれを批判し、安息日の本来の意味を回復されようとなされたのである。

「人の子は安息日の主でもある」（2:28）との結論は、直前のダビデのエピソードとは直接つながらないように思われるかもしれないが、律法の禁令を破ったダビデの権威と「人の子イエス」の権威が関連付けられているのだろう。「安息日の主」とは、安息日を支配する存在であることを示しているが、イエス様は地上においてそのような権威を有する（ダビデ以上の）存在であるのだと仰ったのであろう。まさに律法の「完成」（マタイ5:17）者たるイエス様である。

続くテキスト（3:1-6）は、直前のエピソードに続いて、ここでも安息日のエピソードが語られている。前段で「安息日の主」と表現されたイエス様の権威が、具体的な癒しの行為を通して大きく示されている。前段との相違は、安息日規定を破るのがイエス様ご自身である、ということ。そして前段に引き続いて、ここでも安息日規定をめぐる敵対者（律法学者やファリサイ派）との対立が描かれている。

敵対者たちは、イエス様を訴える（失脚させる）口実を得るべく、安息日に癒しの業を実践するかどうか、様子をうかがっていた。何とも寒々しい観察である。そこには「人のため」（2:27）という心の温かさは微塵も感じられない。※ちなみに、このようにイエス様を監視しようとする彼らの行動は、イエス様がそれまでにも安息日に癒しを行っ

ておられたことを暗示しており、事実、先行する悪霊追放のエピソード（2:21-28）も、「安息日」に会堂でなされたイエス様の癒しであった。

イエス様は、こんな敵対者たちの企てをすでに見抜いておられた。ゆえに、これに続くイエス様の振る舞いは、彼らに対する意識的な問題提起とも言えるだろう。その問題提起とは、「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか」（3:4）である。この問いそのものの答えは自明であり、ユダヤ教のラビ文献においても、生命の危機にある人を救うことは安息日であっても認められていたという。イエス様におかれては、まさにその行為こそが安息日の精神に適うものなのだ、と言っておられるのである。

その問題提起の只中で、「手の萎えた人」（3:1）に対してイエス様は「真ん中に立ちなさい」（3:3）と言われ、また「手を伸ばしなさい」（3:5）と言われた。そしてその通りになった。ここにもその身体的状態のゆえに「罪人」扱いされ、交わりから遠ざけられ、周辺化されてきたその人が、（神と人との）交わりの「真ん中」に引き出され、その痛みが回復させられる出来事がある。そしてこれは、まさにこの人に「安息」が訪れたその時であった。

しかしその出来事（本来誰もが喜んでしかるべきこと）に対し、敵対者たちは「どのようにしてイエスを殺そうか」（3:6）と相談をし始める。まさに狂気である。ここ（イエス様の公生涯の初期段階）においてすでに「十字架」の影は忍び寄っているわけで、それほどこの「安息日」問題は当時のユダヤ社会を揺るがす大きな問題として受け止められた。

押えておきたいのは、イエス様は決して律法を台無しにされているのではなく、まさに律法の本質に生きようとされた、ということ。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」と言われたとおり。聖書をどう読み、どう適用するか、大変問われる思いがする。

（聖書教育より）

「本来の目的である大切な部分を疎かにし、どうしてもよい部分に力を注ぐことを本末転倒と言います。・・・何を最も大切にすべきかは『命を守る』観点に立てば絞られてくるはず。」
（大人クラス）